jyukyo dayori
住居だより
ひと と 空間 を科学する

日本女子大学 住居学科のニュースをご紹介します。

No.020
Jan.2016

topic 1

雑司が谷 鬼子母神堂が、国の重要文化財に！

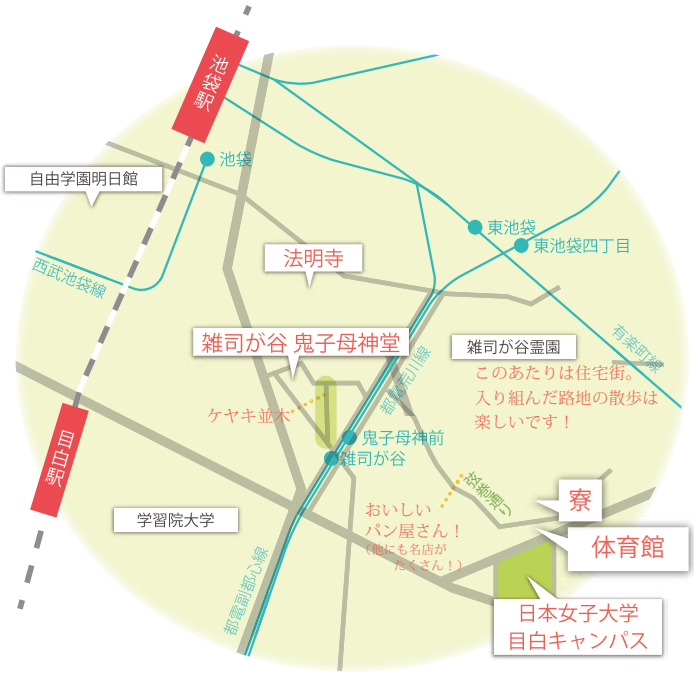
雑司が谷駅近くにある鬼子母神堂が、国の重要文化財に登録することが相応しいという答申を、文化審議会が文部科学大臣にしました。豊島区の建築物では自由学園明日館が既に国の重要文化財ですので二番目です。既に東京都の指定文化財となっていましたし、日本ユネスコ協会からは雑司が谷の鬼子母神堂も含めた活動が未来遺産プロジェクトに認定されていました。

今回の重要文化財指定にあたっては、日本女子大学文学部史学科を卒業した鬼子母神堂を所有する法明寺の近江住職の御嬢さん、昨年度退職された永村眞先生など、日本女子大学関係者が多いに尽力されたとのこと。私たちが誇れることが一つ増えたように思います。

鬼子母神堂の本殿は、1664年（寛文４年）に安芸藩の浅野光晟の正室であった自昌院が寄進してつくられたとのこと。安芸のつくりが随所に見られる建物だそうです。鬼子母神堂周辺は、江戸時代からの観光地です。農地も多くある江戸の郊外でしたが、今は木造密集市街地の真中にある緑豊かな境内です。第二次世界大戦で周辺は焼失したにもかかわらず、鬼子母神堂周辺のみは難を逃れることができました。雑司が谷は、かれこれ40年近く防災まちづくりに取り組んでいますが、まだまだ火災が発生した際には延焼の危険の高い場所です。５月25日に開催された本答申の報告会には多くの地元の住民が参集しましたが、地元消防団を含めた消防関係者も集まっていました。

鬼子母神堂内の様子

参道のけやき並木（この並木も東京都の指定文化財です）、趣のある住宅と路地、そして雑司が谷のコミュニティが、国の重要文化財のある町として、どのような姿となることが相応しいか、皆さんも考えながら町を歩いてみてください。（薬袋記）



雑司が谷を歩いてみよう！

重要文化財指定についての地元報告会

熊本地震避難所調査から東京を考える

住居学科准教授 薬袋 奈美子

震度７の地震が立て続けに発生した熊本地震は、改めて災害への備えの在り方を考えさせられました。これから色々な問題が見えてくることと思います。今までは防災や復興まちづくりの調査を行っていて、避難所は立ち寄る程度でしたが、今回は、4月29日から3日間、熊本市内の避難所調査に参加しました。調査の主体は、横浜市立大学石川永子先生ですので、詳細な報告はこの先生のお名前で発表されることになると思いますので、関心のある方は注目していてください。ここでは簡単に所感をお伝えします。

震度が大きかったのは益城町ですが、被災住民・被災建物が多かったのは熊本市。避難所の数が非常に多く、多様な住民が住む都市的要素が強い場所ですから、東京の震災に備えるために何を考えるべきなのかは、熊本市内の避難所の様子から多くのヒントが得られそうです。

今回の特徴の一つは、もともと指定避難所として用意されていた場所以外にも、沢山の避難所が開設されたことです。指定外の避難所が必要となった背景には様々な理由があります。指定避難所に入りきれなかった人、食事の提供やトイレの度に長い行列を待たされたりすること等様々です。指定避難所以外も行政は把握し、物資の配給などが行われましたが、約二週間が経過した時点で、多くの指定外避難所は閉鎖され始めていました。東京でも現在指定されている避難所に収容できる人数は人口に対してごく僅かです。実際に大きな災害が起きたら、指定外の場所でも多くの人が避難生活を送ることでしょう。つまり避難所を柔軟に設置し運営する力が私たちに求められているのです。皆さんの住む町では、どんな場所が指定外避難所として利用できそうでしょうか？その際どのような課題が発生しそうでしょうか？考えてみてください。

東京での震災に向けて教訓は沢山ありますが、今や家族同然となったペットがどのように避難生活を送るのかも深刻な課題になりそうです。室内で飼育されている犬や猫が沢山いるようですが、過密居住空間となる避難所での同居は、衛生上の問題から不可能です。熊本市内の避難所の多くは、ペットのいる人は、グラウンドに停められた車の中でペットとともに避難生活を送っていました。多くの人が車（それも大型のワンボックスカー！）を持ち、東京に比べてはるかに人口密度が低い場所だから可能でしたが、東京ではどうなるのでしょうか？

今回の調査では、避難所運営にかかわる重要な課題が沢山見えてきました。論文や報告書として公表されることと思いますので、関心のある方は注目していてください。

小学生も炊き出しのお手伝い。

エントランスホールに家族ごとに
段ボールで仕切りをつくり家族ごとに居住空間を確保。

宿泊したゲストハウスは、被害の大きい阿蘇方面の支援の拠点。 日頃からゲストハウス運営を手伝っている仲間が集まって熱い議論が交わされていました。

熊本市から避難所調査の了解が得られた翌日からの実施だったため、早朝に調査準備を行い、日中に調査、そして夜にはメンバーでの意見交換という充実した調査でした。